商家の活動からみた 18世紀末から19世紀前半の ベンガル

神田さやこ

1 はじめに

18世紀後半から19世紀前半にかけてのイギリス東インド会社(以下、EICと略)統治初期には、塩取引で身代を築いたり、塩取引への参入で経営規模を拡大したエリート一家がカルカッタに数多く誕生した。その中には、W・ヘイスティングズのバニアンであったカント・バブー(カシムバジャル領主ノンディ家)、大事業家のダルカナート・タゴールも含まれる。その他にも、ボウバジャルのモティラル家、クマールトゥリのミットロ家、ボロバジャルのモリク家、ハットコラのドット家等カルカッタの名族の多くが塩取引に何らかの形で関わった。このように、この時期のカルカッタのエリート層の形成と塩への投資は深い関係があった。こうした両者の関係はよく知られ、小説の題材にもなっている。例えば、シュニル・ゴンゴパッダエの小説『あの頃(Sei Samai)』[Gangopadhyay 1981 & 1982]の主人公シンホ家は、ジョラシャンコに居を構えるカルカッタの富裕なザミンダールとして登場する。同家は、フーグリ県の寒村からカルカッタに移住し、そこでの塩取引で成功し、さらにザミンダールとなった家として設定されている。地方からカルカッタに移住し、「塩長者からザミンダールへ」という同家の成功物語は、まさに、この時期の経済、社会の大きな変化の恩恵を受けて成功したエリート一家の典型例なのである。

前出のカルカッタの名家がよく知られている一方で、この時期に塩取引を通じて成長したのは、かれらのような、シュボルノボニクに代表される伝統的商業コミュニティ出身の家やカヨストやバラモンといった高位カーストの家ではなかった。また、塩長者と呼ばれるような家の出現がカルカッタに限定されていたわけでもなかった。史料制約が大きい

いため、この時期のベンガル商家、とくに地方商家の活動はほとんど解明されてこなかったが¹、本稿ではEICの塩専売関連文書と裁判文書を利用して、塩取引で成功した商家の活動を事例に、EIC統治初期におけるベンガル社会経済の特徴を市場と人的関係を中心に概観したい²。

2 EIC政府の塩政策と東部インド塩市場

ベンガルでは1772年に塩専売制度が導入されると、塩専売収益が地税に次ぐ主要財源となり、EICによる統治を財政的に支えるようになった。政府は、1780年代における一連の専売制度改革を通じて、専売地域（ベンガルおよびビハール）における塩の高価格を維持し、収益を最大化させる高塩価政策を採った。そのため、政府は供給量を厳しく制限する必要があった。具体的には、製塩地域をミドナプルからチッタゴンまでのベンガル湾岸沿いに限定して製塩を政府の管理下におき、民間による輸入および硝石の副産物のような食用塩化物の生産を禁止したのである。しかしながら、実際には、密輸や不法生産による価格低下を抑制することを主たる目的として、貿易統計にはあらわれない政府勘定でコロマンデル海岸等の近隣地域から塩が「輸入」されていた。その規模

表 東部インド地域塩市場圏

地域市場圏	塩の種類	主要塩集散地	卸売商人の主要拠点	主要商人コミュニティ
西部ベンガル&ビハール	ヒジリ トムルク チョビシュ・ポ ルゴナ コロマンデル オリッサ	ガタル、アムタ ギリハティ ボドレッシュヨ ルカルナ、カトヤ バトナ シャルキア (外国塩)	カルカッタ (ハットコラ、 チトプル) カ ルナ カトヤ フーグリ川沿い 卸売市場	ベンガル系 ティリ シヨドゴープ等 ビハール系 カルワール等
中部ベンガル	チョビシュ・ポ ルゴナ ジョソール ブルア	モドゥカリ シラジゴンジ	フォリドブル 県各地 タリゴンジ (カツカッタ南部)	ティリ シャハ
東部ベンガル	ブルヤ チッタゴン ジョソール	ナラヨンゴンジ ナルチティ	ナラヨンゴンジ タカ県 フォリドブル県	シャハ ティリ ギリシャ系
ミドナプル以西 (チョタナグプル)	ヒジリ トムルク	カシゴンジ	カシゴンジ ミドナプル県	?

は1820年代には政府の総供給量の約25パーセントにのぼった。特筆すべきは、ベンガル塩が煎熬塩であったのに対して、コロマンデル塩は天日塩であったことである。

塩は、ベンガル湾岸の製塩地域から製塩地近郊あるいは河川交通の要衝にある塩の集散地市場に運ばれた。そこから、さらに近隣地域の卸売市場に移出されたり、周辺の農村市場に販売された。表をみてみよう³。西部の製塩地域で生産された塩（ヒジリ塩、トムルク塩等）やカルカタ港に輸入されたコロマンデル塩等の外国塩は、製塩地近郊やフーグリ、バギロティ川沿いの集散地に運ばれ、そこから西部ベンガルからビハールにかけての地域に供給された。地理的環境に強く規定された舟運中心の流通構造であったため、東部インド塩市場は水系によっていくつかの産地（銘柄）別市場に分断されていた。しかし、単に水系によって市場が分断されていたわけではなく、それぞれが自律的な地域市場圏として存在していたと考えられる。表に示されているように、地域ごとに異なる商人コミュニティが塩取引に関わり、西部と東部の商人は、服装、言語、商慣習のすべてにおいて異質であった。また、塩の嗜好にも相違がみられた。天日塩市場は、煎熬塩供給が不足しがちなビハールと天日塩が好まれる西部ベンガルに限定され、とくに煎熬塩への強い選好が見られる東部ベンガルでは天日塩の消費は皆無に等しかった。これらは、地域間の相違の背景には、地理的条件だけではなく、地域の文化や社会構造等が存在したことを強く示唆している。

3 新興塩商人層の台頭

高塩価を柱とする専売制度では、政府による製塩管理および供給量制限と並んで競売による販売制度が重要であった。1788年に販売量および回数を制限した競売が始まると、少数の買付け人が塩の買占めを行うようになった。その結果、政府による供給量制限と買付け人の価格操作というシナジー効果によって塩価格が高値で維持されるようになったのである。また、政府が製塩を直接管理下に置き、EIC領内でザミンダール等の私的な関所を禁止して自由な流通の実現を目指したことは、生産・流通過程から特権商人やザミンダール等の旧利害や徴税請負人を排除し、雑多な商人にも塩取引への参入機会を提供したのである。この商機を掴んで塩取引に参入したのが新興塩商人たちであった。かれらは競

売で塩を買占めるだけではなく、カルカッタや塩集散地市場に支店と倉をもつ卸売商人として塩の需給および卸売市場と農村・小売市場を結ぶ小規模商人の活動に対して強い影響力をもつようになった。

新興塩商人層は、ギリシャ商人を除いて、特定コミュニティに属するヒンドゥー商人であった。西部ベンガルでは、シヨドゴブやボシヤクを含むいくつかのコミュニティで構成されたが、中部ベンガルから東部ベンガルにかけての地域では、商人層の大半がティリあるいはシャハであった。後述するラナガートのパルチョウドゥリ家はティリであり、ダカ近郊バリアティのシャハ（後のロイチョウドゥリ）家は塩取引を通じて最も成功したシャハ・ファミリーの一つであった。

4 新興塩商人の事例—ラナガートのパルチョウドゥリ家—

新興塩商人の事例として、ノディヤ県ラナガートのパルチョウドゥリ家の活動をみてみよう。キッシェンチョンドロ・パルチョウドゥリ（キッシェン・パンティ）は、18世紀後半にラナガートからカルカッタに移り、小規模の塩取引から一代で身代を築いた人物である。元来キンマの葉の商いに従事していたのでパンティと呼ばれていたが、ノディヤのマハラジャ、シーブチョンドロ・ラエからチョウドゥリの称号を与えられ、本来の氏であったパルと組み合わせたパルチョウドゥリを名乗るようになったと言われる [Majumdar 1978: 448-449]。キッシェンチョンドロは、ハットコラ（カルカッタの塩市場）のカルタ・バブーと呼ばれるまでに成長した [Barui 1985: 133]。同家は、ラナガートに近いハンシュカリ、カンチョンノゴル、カルナ、ボゴバンゴラ、ボドレッシュル、そして製塩地域のトムルク等に塩倉と支店を有した。また、パトナ向け塩移出も数名の商人と寡占していた。西部ベンガルのみならず、1810年代頃まではナラヨンゴンジ、ダカ、シラジゴンジ等の東部ベンガル主要市場にも塩倉を構え、広域の流通網を構築した。

1793年に永代ザミンダーリー制度が導入されると、キッシェンチョンドロは、弟のシオンブーチョンドロとともに地所購入に乗り出した。一般に、都市部の商家やエリートによる地方のザミンダーリーへの投資が本格化したのは1830年代になって以降のことであった [Ray 1979]。しかし、実際には地方のザミンダーリーに積極的に投資する者も存在したのであり、パルチョウドゥリ家はそうした商家の一つであった。こうし

て、同家はしだいに商人ではなくザミンダールを名乗るようになり、遅くとも1820年頃までにはカルカッタのオビジャト・ボッドロロクとみなされるにいたった [Mukhejee 1970: 46-47]。同様のことは、バリアティのシャハ家にもあてはまる。シャハ家は、ナラヨンゴンジ、ナルチティ等を拠点に主に東部ベンガル市場圏(表参照)で活動する商家であった。ゴビンドラム・シャハは、キッシェンチョンドロ・パルチョウドゥリと同様に、18世紀半ば頃に塩取引に参入し、大ザミンダールになった人物である [Allen 1912: 170]。同家はバリアティ・バブーと称され、社会的にも大きな成功をおさめた。

さて、1807年のションブーチョンドロに続いて、1809年にキッシェンチョンドロが死去すると、同家の経営は、それぞれの息子たちの間で分割された。キッシェンチョンドロの4人の息子は合同で経営を引き継いだ⁴が、1821年には家産と経営をめぐる兄弟間の争いが訴訟へと発展した。ションブーチョンドロの2人の息子も1813年には経営を分割したが、資産をめぐる争いは1822年に2人が相次いで死亡した後も続いた。パルチョウドゥリ家の経営は、1820年代半ば以降、塩価格の下落、カルカッタ金融市場の混乱、地方商人の台頭等の複合的要因によって急速に悪化した。N・K・シンホが指摘するように [Sinha 1984: 94-101]、合同家族制度が訴訟を招きやすいとすれば、裁判に多額の費用を注ぎ込んだことは同家の没落の一因といえるかもしれない。しかし、この頃のカルカッタでは訴訟には大きな社会的意味があったことも指摘されよう。『シヨマチャル・ドルボン』紙によれば、「ザミンダールにとって最高裁判所における訴訟は立派な社会的地位の証として高く評価され」、「2、3件のエクイティの訴訟を抱える者は、ドゥルガ女神祭祀で2万ルピーを使うほど大変な荣誉の証となった」という [Chattopadhyay 1989: 31]。

商業的に成功し、豊かになることは、社会的成功の鍵となったが、その十分条件ではなかった。したがって、ザミンダールになることや裁判に多額の資金を投入するといった行為は、急速に富を獲得したパルチョウドゥリ家等の新興商人が高い社会的信用と地位を獲得する手段として効果的に機能したといえよう。

5 商家経営、市場、人的関係

ベンガル湾岸地域で生産された塩は、パルチョウドゥリ家やシャハ家

等の卸売商人によって、集散地市場の自家倉に運ばれた。そうした卸売市場には近隣地域からバイカールやフェリヤと呼ばれる小規模商人や遠隔地の卸売商人が塩の買付けに集まった。すなわち、主要な卸売市場は、モノだけではなく、多様な商人層の結節点でもあった。東部インド塩市場は地域的に分断されていただけでなく、卸売市場を軸に異なる商人層が関わる構造でもあったといえる。とはいえ、こうした市場や商人層の分断がモノ・ヒト・カネの大規模なフローを妨げたわけではなかった。多様な商人層を結び付ける制度が卸売市場には備わっていたからである。とくに重要なものは、ゴモシュタとダラルと呼ばれる仲介者とドルと呼ばれる多カーストの組織であろう。

仲介者からみてみよう。ゴモシュタは主人にかわって実質的に本支店の業務を担う番頭である。かれらは主人よりも担当地域に関する正確な情報を把握し、良いゴモシュタを雇用することは、商家や地所経営の成功の鍵を握ったと言われる。ダラルは市場における情報提供者であり、商家経営から独立し、匿名の売り手と買い手を引き合わせる役割を担った。いずれもそれぞれの市場で信用力が高い人物であった。かれらの社会的信用が、卸売商人に信用と正確な情報を提供し、商慣習や言語が異なる多様な商人層を市場で結びつけたのである。仲介者の多くが、バラモンやカヨスト等上位カーストに属していたことも注目されよう。

次に、ドルについて検討しておこう。カルカッタ等の都市では、バラモンやカヨストを中心に18世紀後半以降ドルと呼ばれるエリート派閥が多数組織された [Mukhejee 1970: 1975]。ドルの主要な機能は、カースト、相続、婚姻、カースト間関係に関する問題や争いを解決することであり、その多くが多様なカースト・メンバーで構成されていた。ムルシダバードの事例では、ドルには、信用ある商人による仲裁・調停、メンバー間の商圏の調整、政府に対する陳情の組織等の機能があったという [Datta 2000: 211-212]。これを考慮すれば、ドルは商人組織としての機能をもち合わせていたともいえよう。さらに、ムルシダバードでは、エリート商人で構成されていたドルに、ティリヤシャハなどの新興商人が新規に参入しはじめた。この事例が示すように、パルチョウドゥリ家のような新興商人の台頭は、都市のエリート社会の秩序に異変をもたらしたと考えられるのである。ドルに入ることは新興商人にとって信用・名誉・情報の獲得につながった一方、既存のドルは、新興商人を内部に取

りこむことで、かれらの機会主義的行動を抑制し、秩序の維持をはかったといえるだろう。

6 おわりに

商家経営の基本単位は家族であったが、家族やカーストを超えた多様な人的関係がこの時期の商家経営の大きな特徴であった。東部インドの地域的な分断と卸売市場を軸として多様な商人層が関係するという構造が、仲介者や多カーストの組織といった商取引制度の発展を促したと考えられる。EIC 統治初期において商取引が活発になり、社会的流動性が高まる中で、ザミンダール化や訴訟を通じて社会的地位を上げ、多様な人的関係の構築によって商家としての信用と家の名誉を獲得することが、新興商人層にとって一層重要になっていった。こうした特徴は、19世紀後半の商家経営を取り巻く環境と比較すると一層明確に浮かび上がる。仲裁や調停といった私的制度は、新たに導入された司法制度やカースト別組織に代替されていったとみられる。19世紀後半における急速なドルの衰退は [中里 1998: 310-311]、この変化を物語っているといえよう。

註

- ¹ この時期の経営史研究としては以下が挙げられる。[Kling 1976]、[Nandy 1978 & 1981]。
- ² 本稿の内容は、神田さやこ『インド地域市場の展開とイギリス東インド会社』(名古屋大学出版会、近刊)に基づいてまとめたものである。なお、本稿で使用した主要資料は、英国図書館・西ベンガル州立文書館所蔵のイギリス東インド会社文書、カルカッタ高等裁判所所属の裁判文書である。
- ³ 本表は、塩に付帯するロワナと呼ばれる関所通過許可証に記録された仕向地や買付け人名等の情報をもとに割り出したものである。
- ⁴ カルカッタ高等裁判所所蔵の裁判文書にはパルチョウドゥリ家の資産をめぐる裁判記録が多く残されている。なお、裁判文書は未整理のため各裁判記録に資料番号は付与されていない。

参考文献

- Allen, B. C., 1912, *Eastern Bengal District Gazetteers: Dacca*, Allahabad: Pioneer Press.
- Barui, Balai, 1985, *The Salt Industry of Bengal 1757-1800: A Study in the Interaction of British Monopoly Control and Indigenous Enterprise*, Calcutta: K. P. Bagchi.
- Chattopadhyay, Basudeb, 1989, "Police Tax and Traders' Protest in Bengal 1793-1798", in Basudeb Chattopadhyay, Hari S. Vasudevan, and Rajat Kanta Ray (eds.), *Dissent and Consensus: Protest in Pre-Industrial Societies, India, Burma and Russia*, Calcutta: K. P. Bagchi.
- Datta, Rajat, 2000, *Society, Economy and the Market: Commercialization in Rural Bengal, c. 1760-1800*, Delhi: Manohar.
- Gangopadhyay, Sunil, 1981 & 1982, *Sei Samai* (in Bengali), Kolkata: Ananda Publisher.
- Kling, Blair B., 1976, *Partner in Empire: Dwarkanath Tagore and the Age of Enterprise in Eastern India*, Berkeley & Los Angeles: University of California Press.
- Majumdar, Durgadas (ed.), 1978, *West Bengal District Gazetteers: Nadia*, Calcutta: Government of West Bengal.
- Mukherjee, S. N., 1970, "Class, Caste and Politics in Calcutta, 1815-38", in Edmund Leach et al., *Elites in South Asia*, London & New York: Cambridge University Press.
- Mukherjee, S. N., 1975, "Daladali in Calcutta in the Nineteenth Century", *Modern Asian Studies*, 9-1, pp. 59-80.
- Nandy, Somendra Chandra, 1978 & 1981, *Life and Times of Cantoob Baboo (Krishna Kanta Nandy): the Banian of Warren Hastings. Period Covered 1742-1804*, 2 vols, Bombay: Allied Publishers.
- Ray, Ratnalekha, 1979, *Change in Bengal Agrarian Society, 1760-1850*, Delhi: Manohar.
- Sinha, N. K., 1984, *The Economic History of Bengal 1793-1848*, vol. 3, Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay.
- 中里成章、1998、「都市の生活」、佐藤正哲・中里成章・水島司『ムガル帝国から英領インドへ』（世界の歴史第14巻）、中央公論社、291-311頁。

かんだ さやこ ●慶應義塾大学経済学部教授